



NO. 45 (通算219)

絵・文・題字
渋谷 一夫

子どもの楽園“水辺”

最近、川や堀・池などに、子どもの姿が見られなくなった。事故や事件防止から止むを得ないことだが、寂しい限りだ。自然環境が悪くなり、子どもが自然に親しむ場所も時間もなくなった。従って、子どもが自然から学ぶ機会も少なくなった。

第二の教育現場

昔から、水辺は子どもにとつての最大の遊び場だった。学校から帰ると、かばんを放り出して川や堀に一直線。魚を捕まえたがり、水生こん虫をすくったり遊びは尽きなかった。学校が第一の教育現場

なら、水辺や野山は第二の教育現場だった。自然そのものが先生だった。遊びの中で生き物と関わっているうちに、自然の仕組みや生き物の生態を体験を通して学んでいたものだ。自然は、貴重な教師だったのである。

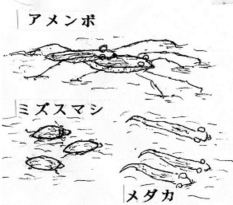


水辺の生き物

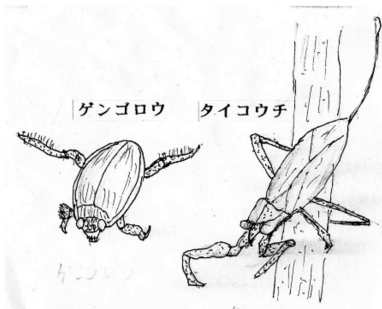
「川と水の古里」といっても過言ではない半世紀前の南畑は、荒川や新河岸川に限らず、あちこちに池や沼・堀や溝が点在していた。水はいつもき

れい。万一汚れても、ヨシやマコモなどの水生植物が、すぐに浄化してくれた。魚や水辺の生き物にとっては、絶好の自然環境だったのである。

水辺をのぞくと、メダカやアメンボ・ミズスマシが水面に散見される。スポンの裾をまくり、袖をたくって水に入る。アメンボ、ミズスマシ、メダカ



ガメ・タイコウチ・ミズカマキリなどの水生こん虫もさまざま入ってくる。



底の方をすくうと、アメリカザリガニやタニシ・ドブガイ・オタマジャクシ・ドジョウなども入ってくる。時には、腹の真つ赤ないもりやトンボの幼虫のやご・ホタルの幼虫も入ってきて、びっくりすることがある。

ここに挙げたのはほんの一例だが、水辺にはまだまだ数限りないさまざまな生き物がいた。

自然体験から科学へ

こんな生き物に関わっていると、アメンボやミ

ズスマシは何故水上を歩けるのかな、モノアラガイは何故水面の下を逆さに歩けるのかなと、不思議な現象に興味を湧いてくる。自然科学への第一歩はここにある。



ヘイケボタルの幼虫 (モノアラガイを襲う)

半世紀前の南畑には、こんな自然環境が身の回りにあったのだ。だが、世の中の自然環境は大きく変わった。自然を見つめる生活環境も失われつつある。残念だ。